

国語

(9 : 10 ~ 10 : 00)

注 意

- 1 検査開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1 ページから12 ページに、問題が一から三まであります。
これとは別に解答用紙が1 枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学二年生の白岡^{りっか}六花は、小学生のときに、同級生の春山^{はるやま}早緑から「え、なんでこんなじょうずに描けるの？ ガハクじゃん！」と描いていた絵をほめられた。これをきっかけに、六花と早緑は仲を深めていった。しかし、二人は、あることでけんかをして、現在は距離をおいている。六花が、そのことを同級生の黒野という男子生徒に話すと、黒野は「じゃ、なかなかおりのチャンスが来たら、逃すんじゃないぞ。」と言った。

去年の二学期。十月の半ばのことだ。
それまで、私と早緑は、まだいっしょにいた。クラスはちがったけれど、私は早緑の部活が終わるのを待って、いっしょに帰った。
きっかけは、部活のぐち——ほんとうに、ささいなこと。
いやなことがあって。それを友だちに聞いてもらって。そうして、なんとなくすっきりする。そんなの、だれだっと思っていること。とくにめずらしくもない、ふつうのこと。

なにも特別じゃない。日常のひとつ。
上校先生には言えなかったほんとうの気持ち。ずっとがまんして、のみこんで、黒々とした潮^{しほ}のようにたまっていた感情。私はそれを、早緑に聞いてほしかった。

あの子なら、いっしょにおこってくれると、そう思ったから。
「……どうしてみんな、ちゃんと絵を描かないんだろう。」

私は美術部でのことを話して、最後にこう言った。

「ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに。」
それ、ほんとひどい——そう言ってくれると思っただ。
六花は悪くないって。なにもまちがってないって。
なぐさめてくれるって、励ましてくれるって、信じていた。
だけど、そうじゃなかった。早緑はいやそうな顔で、吐きすてるみたいに言った。
そんなの、しょうがないよって。

「だって、六花みたいに、才能がある子ばかりじゃないでしょ？」
「だれだってさあ、どうしても勝てない人を見たら、やる気もなくなっちゃうよ。」

そう言って、早緑は美術部の子たちの 。私の味方じゃなくて、あの子たちの味方をした。あの子たちがまじめにやっていないのは、私のせいみたいだな、そんな言い方をして、私のことを責めた。
ショックだった。それから、怒^{いか}りがわいてきた。
でも、何度説明しても、早緑はわかってくれなくて。
それどころか、どんどんふきげんになっていって。

①「いいよね、白岡画伯は。」
最後に、早緑は言った。

「好きなことがちゃんとあって。得意なことがちゃんとあって。幸せじゃん、それ。」

早緑のその言葉で、そのときの表情で。
私にはわかった。わかりたくなかったけれど。

私たちは、おたがいに関わりあえないんだってことが、わかってしまった。

帰り道のとちゅう、私はコンビニの向かいにある公園に立ちよった。

通学路にあるこの公園には、小学校のころからよく来る。まへは、あの子もいっしょに。いっしょじゃなくなった今でも、ときどき。すみっこにあるベンチに腰かけて、遊んでいる子たちをぼんやり見て、気が向けばスケッチもする。

すべり台で遊んでいるちいさな子。そのむこうの広場で、キャッチボールをしている小学生たち。

スケッチブックを広げて、でも、鉛筆をにぎる手に力が入らなかった。

「……好きで、絵を描いているだけ。」

ひとり、ちいさくつぶやく。

それだけなのに、どうして責められないといけないのだろう。

私は絵を描くのが好きで、得意で、それは才能とか、努力とか、いろいろな言葉で表されるかもしれないけど、少なくともにかしらの価値があるもので、あの子が言うように、幸せなことにはちがいない。

だけど、絵を描くのがいくら幸せだって、いつも楽しいわけじゃない。苦しいときだってある。さびしいときだってある。

そんな気持ちを分かちあいたいと思うのは、欲張りなのかな。好きなことがあるっていうだけで、満足しないといけないのかな。

それ以上のことを望んではいけなかったのかな……。

いつのまにか、公園から子どもたちはいなくなっていた。

私はベンチの上でひざを抱いた。目をつぶって、ちいさく息を吐く。

い。

「だれに聞いたの？」

「くろ……いや、いいじゃん。そのことは。」

早緑、^㉗テれているみたい。私はくすんと笑った。

「六花は、どうしたの？ またスケッチしてたの？」

「……しようと思ったけど、気分が乗らなくて。」

私の言葉に、早緑は眉間にきゅっとしわをよせる。それから、すたすたと歩いてきて、となりにすわった。カバンをベンチに置いて、足をばたばたさせる。

「なんか、ひさしぶりだね。」

毒にも薬にもならないような私の言葉を無視して、早緑は言った。

「六花、やっぱりまだ、部室で絵を描かないんだね。」

私はだまっていた。なんて言ったらいいのか、ひとつも思いつかなかった。

しばらくして、早緑は口を開いた。

「あのね、六花。あたしさ、ずつと言いたかったことがあって。」

その真剣な声に、覚悟を決めたような表情に、さつと心が冷えるのを感じた。無意識に体がぎゅつと^㉘チヂこまって、ようするに私はこわがっているらしい。

わかったからだ。早緑が、あの日の続きを話そうとしているって。

逃げだそうかと、一瞬思った。

このまま立ちあがって、ふり返らずに立ち去ってしまおうか、と。だけど……。

そもそも、どうして絵を描くのが幸せだって、思ったんだっけ。私はどうして、絵を描いているんだっけ……。

——え、なんでこんなにじょうずに描けるの？ ガハクじゃん！

脳裏に響くあの日の声。そつと、眼鏡のつるに手をふれる。

そのとき、私はようやく、自分の気持ちに気づいた。

「見つけ！ って、あれ……？」

そんな声がして、私は顔をあげた。心臓が止まるかと思った。

「おかしいなあ。いたと思ったんだけど。」

そう言いながら、すべり台の下をのぞきこむポニーテール。

思わず、声もれた。

「早緑……？」

結わえた髪がなびく。ふり返った早緑の目が、びつくりしたように大きくなる。

「六花。」

沈黙があった。

早緑は気まずそうだった。そうだろうな、と私は思う。私だって気まずい。だけど、いつまでもだまっているわけにはいかない。おずおずと、こんなことをたずねた。

「……『見つけ』って、なんのこと？」

「え？ あ、うん。そうね。あのー、野良ネコがね、公園にいるって聞いてさ。」

ごまかすように笑う早緑。私はうなずいた。

正直ちよつとおもしろかった。でも、どんな顔をしていいかわからな

——じゃ、なかなかおりのチャンスが来たら、逃すんじゃないぞ。

「……なに？」

しばらくした声はかすれていた。早緑はうなずく。

「あの、こんなこと言ってもしょうがないのかもしれない。六花のこと、こまらせたらごめん。でも、言わなきゃって、ずつとずつと、そう思ってた。」

何重にも予防線を張るように前置きをしてから、早緑はためらいがちに言った。

「あたしさ……ほんとのこと言うと、毎日泣いてたんだ。あのころ。」

泣いてた？

「……私とけんかしてから、つてこと？」

早緑は首を横にふった。

「ううん、ちがうちがう。そうじゃなくて、そのまえから。」

「そっか……うん。」

^㉙ちよつびり期待して、それからがっかりした自分が、ひどくはずかしい。

つて……え？

「私とけんかする、まえ？」

早緑はうなずく。

「陸上部の練習が、いやでいやで。みんな、あたしよりずっと足が速くてさ。練習もきつくて、ぜんぜんついていけなかった。先輩こわいし。しょつちゅうおこられてたし。ほんと、毎日毎日、つらくてしょうがなくて。家でめそめそ泣いてたの。」

私はとなりを見た。なつかしい、早緑の横顔。遠くを見つめる黒い瞳。「でも、六花には言えなかった。そんなこと、ぜったい言えなかった。はずかしかったから。一生懸命、絵を描いて、努力を楽しむことができた六花に、そんなこと、言えなかった。まぶしかったよ。あたしは六花のことが、ずっとまぶしかった……だからさ、あの日。あたし、責められてるような、そんな気がしちゃったんだよ。」

――ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに。

④あの日、自分が放った言葉が、どこか遠くで響いた。

早緑はちいさく笑った。ぼつぼつ、抱えていた気持ちをこぼすように、言葉をつむぐ。

「あたしもさ、意地になっちゃって。あたしのことじゃないのに。六花がきずついていたの、わかっていたのに。でも、あたしもさ、あのとき、ほんとにつらかった。大好きだった友だちに、自分のことを否定されているような、気持ちがしてさ。だから、あんなこと言っちゃった。六花に、ひどい言い方、しちゃった。ほんとうに……」

そう言って、おそおそとこちらを見た③早緑の顔が、固まる。

「六花？」

「……ごめん。」

「え、いや、ごめんごめん。あの、なに？ 泣かないで。ちよつと……あ、ハンカチ。」

あわあわとポケットをさぐる早緑。私はふるえていた。

景色がにじんで、ぼろぼろとこぼれて、息をするのもつらかった。

なにか、「わかりあえない」だ。

1 ㊦㊧㊨のカタカナに当たる漢字を書きなさい。

2 に当てはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 背中を押した イ 腕を上げた
ウ 足を洗った エ 肩を持った

3 ①いいよね、白岡画伯はとあるが、早緑がこの発言をした意図として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 迎合 イ 賞賛 ウ 皮肉 エ 共感

4 ②ちよつぱり期待してとあるが、六花はどのようなことを期待したのですか。三十五字以内で書きなさい。

5 ③早緑の顔が、固まるとあるが、早緑の顔が固まったのはなぜですか。三十字以内で書きなさい。

わがろうとしなかったのは、私のほうだった。自分のことでいっぱいいっぱい、早緑の気持ち、考えたこともなかった。

さんざん被害者のような顔をしてたくせに、ほんとうに悪いのは私だった。

私、早緑のこと、きずつけてたんだ。

「ほら、ちよつと眼鏡外して。あ、鼻もたれてるよ、もう……。」

そう言って、私の顔をハンカチでぬぐう早緑。私はしゃくりあげながら、くり返す。

「ごめん。ごめんね、早緑。ほんとうにごめんなさい……ごめんなさい……。」

「ううん、いいから。もういいんだよ。あたしこそ、ごめん……ああ、まずったな。泣かれると思わなかった。っていうか、六花も泣くんだね。はじめて見たよ。」

あはは、と④カロやかに笑う早緑。

（村上雅郁⑤「きみの話を聞かせてくれよ」による。）

（注）㊦ 液体の底に沈んだかす。

6 ④あの日、自分が放った言葉が、どこか遠くで響いたという描写について、国語の時間に、生徒が班で話し合いました。次の【生徒の会話】はそのときのものです。これを読んで、空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、三十字以内で書きなさい。また、空欄Ⅱ・空欄Ⅲに当てはまる適切な表現を、それぞれ四十五字以内で書きなさい。

【生徒の会話】

清水： 「自分が放った言葉」とは、この描写の直前の言葉だよな。

藤井： そうだね。「ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに。」の直前の「――」は、六花が何かをきっかけに、思い出した言葉であることを表しているのだと思うよ。

川上： 六花が、その言葉を言ったときには、ただ（Ⅰ）
という気持ちで言ったけど、早緑にわかってもらえずに、二人は距離をおくようになったんだよな。

村上： うん。六花はそういう気持ちで言った言葉だけど、当時の早緑は、（Ⅱ）
ように感じてしまったんだよな。

川上： そうだね。六花は、早緑から当時の気持ちを聞いて、はじめ（Ⅲ）
なるほど。「どこか遠くで響いた」という描写は、そのことに気付いて自分が言った言葉が呼び起こされたということかもしれないね。

問題は、次のページに続きます。

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人工知能が拓いていく新しい文明の夜明け前に佇んで、かすかに色づいてきた地平線を見ている。そんな状況の中で、人類が長く親しんできた主語「わたし」が、「わたしたち」へと移行し始めている。新主語「わたしたち」の共鳴音が、低く静かに世界に響き始めているようだ。

グレッタ・トゥーンベリさんの「科学に耳を傾けなさい」という伶俐な主張は、イズムやイデオロギーを超えた、さらには自我すら乗り越えた独特のトーンをもっている。確かにCOVID-19の問題も、気候変動の問題も、「わたし」に降りかかった災厄^⑦ではなく「わたしたち」が直面している問題である。

新時代に向き合う若い世代のリーダーたちは、多言語に通じていて、地球の裏側で発せられた新聞記事や、エッセイ、あるいは科学論文ですら、すみやかに読みこなし、共有し、ネットを通して世界中に行き渡らせている気配がある。質の良いメールマガジンやニュースは刻々と変化する動向を正確に捉えていて、^①そこでは世界の理性と感性の界面に直に触れているような興奮がある。インターネットの世界は一見エゴが剥き出しになって見えるが、それは表層の出来事であり、深層においては、しなやかで受容力に満ちた新しいインテリジェンスの潮流^⑧が生まれ始めているように感じる。

日本の経済が興隆していた一九六〇年代から八〇年代にかけては、「あなたらしく」とか「わたしらしく」という、個人のアイデンティティを無条件に肯定する態度が^⑨称揚^⑩されていた。「あなたの好きなこ

とを見つけてください」とか「世界にたったひとつのあなた」というような、考えようによっては不自然なほどに個の事情を社会に優先させる価値観も蔓延^{まげん}していた。戦前の全体主義への反省として個人の尊厳を尊ぶ考え方はもちろん共感できる。^a近年、「わたしって……じゃないですか」というような不思議な付加疑問形で自己の嗜好^{しょうこう}を押し付ける語りの圧力や、偏差を個性として振りかざす姿勢には疑問を覚え始めていた。このような「わたし」はインターネットの^bでは徐々に払拭^{はら拭}されつつある。

そもそも「わたし」とは何だろうか。ヒトという生物は、身体を駆使して活動しながら、敏捷^{びんせう}に食物を摂取し、自らを維持継続させていかなくってはならない忙しい動物である。したがって、身体のあるゆるセンサーから得た情報は、「脳」という中枢に集められ、素早い決断が下される。活発に活動する脳は、その個体が生きながらえていくための「適正な動作」を、身体各パーツに向けて発令し続けるのである。そういう意味で、^②ヒトは植物のような生命体とは異なる生存戦略を生み出してきた。「生」あるいは「生命」は、世代や個体を超えて滔々^{とうとう}と受け継がれていくものであるはずだが、「一世代限りの個体」に対する最適解が集中して模索され続けた結果、ヒトの脳はうっかり「わたし」という幻想を生み出してしまった。そんな風に考えられないだろうか。

現在のように、汚染されつつある地球環境や、国家が相互にエゴを剥き出しにしてせめぎあっているような世界を眺めていると、ヒト（ホモ・サピエンス）が生きながらえるには、「わたし」という一世代・一個体にしか適用できない概念に限界が生じ始めているように感じざるをえ

ない。若い世代が「わたし」を脱却し、「わたしたち」という感覚で活動し始めているのは、環境の危機を察知し、本気で生きながらえたいと救いを求めるホモ・サピエンスの本音、あるいは進化への本能的な身じろぎなのかもしれない。

(原 研哉^{けんが} 「低空飛行」による。)

- (注1) 伶俐^{れいれい} 賢いこと。
(注2) イズム 主義。
(注3) イデオロギ― 政治的、社会的なものの考え方。
(注4) エゴ 自我。
(注5) インテリジェンス 知性。
(注6) アイデンティティ 自分らしさ。

6 国語の授業で、次の【記事の一部】を読みました。あとの【ノート】は、ある生徒が本文と【記事の一部】を読んで考えたことをまとめたものです。これらを読んで、【ノート】の空欄Ⅱに当てはまる最も適切な表現を、本文中から十八字で抜き出して書きなさい。

【記事の一部】

今生きている私たちが不適切な判断をして将来の地球環境問題や社会問題などを悪化させてしまった場合、一番困るのは将来の人々です。特に、地球環境はすぐに元通りにはなりません。気候変動の被害が大きくなるような状態になってしまったら、その状態がしばらく続き、その結果、将来の人々の利益や権利、自由を脅かしてしまいます。ドイツでは憲法裁判所が将来世代の観点から政府の気候変動対策を不十分と判決し、現世代の政府に再考を求めました。私たちは将来の人々が気候変動の被害や生態系破壊によって困らないように、しっかりと考えなければならない時代に生きています。

しかしながら、人々は、将来のことよりも現在のことを大切にしがちです。

※ここで言う「将来の人々」には、若者のようなすでにこの世に存在している人々も含まれれば、まだ生まれていない人々も含まれる。

(国立環境研究所ウェブページによる。)

1 ㊦㊧の漢字の読みを書きなさい。

2

a

 に当てはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア つまり イ しかし ウ だから エ そして

3

①

 そこは何を指していますか。四十字以内で書きなさい。

4

b

 に当てはまる最も適切な語を、文章中から二字で抜き出して書きなさい。

5

②

 ヒトは植物のような生命体とは異なる生存戦略を生み出してきたとあるが、ヒトの生存戦略は、どのようなものですか。ヒトの生存戦略について述べた次の文の空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、この文章における筆者の主張を踏まえて、八十字以内で書きなさい。

植物とは異なり、(Ⅰ) という生存戦略。

【ノート】

【記事の一部】で述べられているのは、本文の「わたし」ではなく「わたしたち」という主語で、地球環境問題や社会問題を考える必要があるということではないだろうか。

「わたし」という主語では、【記事の一部】で述べられているような、将来の人々という観点は出てきにくい。そのため、将来の人々のことを考えるには、「わたしたち」への主語の移行、言いかえれば、(Ⅱ) からの脱却が必要であると考える。

問題は、次のページに続きます。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

吾が師常によみ出でらるる歌、いと遅吟にして、人の許にゆきて、そのむしろにのぞみてよまるる歌も、ある時はけふはよみ得ぬなりとて、

今日(けふ)はよむことができないのだ

ひめもす考へられたるままにて、空しく帰らるる事度々なりき。文詞

なども、筆とられてより、幾度か稿をかへて、なほ心に落ちるぬほどは、

そのまま厨子の内に巻き入れおかれて、心のおもむけるをりとう出でて

とり出しては

は、消し補ひなどせられし事常なり。さればみづから許して、清書せら

るるに及びては、誤れる事をささなかりしなり。荒木田久老神主は、

ほとんどなかつたのである

その心掟おほいに異にして、早吟なるのみならず、序文など人に

① 乞はれて、物せらるるをりなども、筆をとりて紙に対へば、詞腸たち

お書きになるとき

まちに動くとして、案をも設けず、ただちに筆を下されしとぞ。秀才なる

事はほめ聞こゆべき事なれど、さればこそその文詞、ともすれば考へた

おぼめする

らぬ事のうち交じるをり有りき。又余りに筆の走るに任せられて、深く

考へらるるまではなかりし事も有りしとぞ。今いづれをかよしといは

ん。

(泊泊筆話)による。

(注1) むしろ 〓 席。

(注2) ひめもす 〓 一日中。

(注3) 厨子 〓 戸棚。

(注4) 詞腸 〓 詩をつくる心。

1 乞はれての平仮名の部分を、現代仮名遣いで書きなさい。

2 ② 今いづれをかよしといはん」とあるが、これについて国語の時間に、生徒が班で話し合いをしました。次の【生徒の会話】はそのときのものです。これを読んで、空欄Ⅰ・空欄Ⅱに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を用いて、それぞれ二十五字以内で書きなさい。また、空欄Ⅲ・空欄Ⅳに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を用いて、それぞれ十五字以内で書きなさい。

【生徒の会話】

青木… 「吾が師」と「荒木田久老神主」の「歌」や「文詞」をつくる時の様子と、できあがった「文詞」の特徴について述べた上でこういつているのだよね。どちらがよいのだろう。

今井… 二人の「文詞」をつくる時の様子を比較してみると、

「吾が師」は、（Ⅰ）のに対して、「荒木田久老神主」は、（Ⅱ）のだよね。このことについて、「荒木田久老神主」は、「秀才」と述べられているよ。

西田… うん。だけど、できあがった「文詞」を比較すると、

「吾が師」のものは、（Ⅲ）のに対して、「荒木田久老神主」のものは、（Ⅳ）のだよね。

田中… それぞれ一長一短あるよね。どちらがよいと簡単にはいえないと思うよ。